ヘルダーリンにおける自然観の展開

長　井　英　子

§1　序

古典主義からロマン主義への過渡期の詩人J・C・F・Holderlin（1770～1843）は、「近代ドイツ文学における非常に大きい存在で（中略）どの流派に属するときめられない」（手塚富雄『ドイツ文学案内』岩波　p.130）独自性を持っている。

しかし、このような評価に到達するまで、ヘルダーリン像は大きな変遷を辿ってきた。19世紀後半には彼は概ね「ロマン主義の傍流」「グレゴマニー」「ロマン的憧憬」「現実逃避」の詩人と見られていた。それは彼の唯一の小説『ヒュペーリオン』に盛り込まれた古代ギリシアへの強い憧れと、ギリシァ人の対極としてのドイツ人への非難に基づく評価であった。けれども、ヘリングラートの、ヘルダーリン全集の編纂（1923年完結）により、19世紀とは比較にならぬほど多くの作品が世に知られるようになってからは、文学のみならず、神話、宗教、哲学の立場から研究されてきた。本論はヘルダーリンの宗教的自然観の展開を追い、神的な自然との関係で語られる「時間」および、歴史の重要な一時点を、自らの生涯を通して具現したと解釈されるキリストに関して述べることにする。

ヘルダーリンは14歳でデンケンドルフの下級神学校に入学し、以後聖職者養成コースを歩み、テュービンゲン大学神学部を卒業した。しかし彼を女手一つで育てた母――自身牧師の娘であった――の期待に反して、彼は生涯、牧師になることを拒み続けた。詩人の鋭敏な感覚は、伝統的神学や、また当時の観念論とは別の領域に、神的なものを捉えていたのである。

「あまりにも強すぎる　ああ　おんみら天上の高みよ／おんみらがわたしを上へと引き寄せる力は！」（『わがもの』『ヘルダーリン全集』I　手塚富雄他訳　河出書房新社p.344以後全集の引用は巻数と頁数のみ）

詩人は、一般の人々には知られないこのような自然力を、詩で世に伝えることに使命を見出していた。

「こよなく至福なものたちはおのずからはなにも感ぜず、／（中略）必ずや神々の名において／ある他者が心を寄せて感じなくてはならない。／この他者を神々は必要とするのだ。」（『ライン』II　p.191～192）「詩人は精神の世界に住む者も、／現世的でなければならぬ。」（『唯一者』第一稿 II　p.207）

青年期の作品では、自然は専ら優しく慰める、静かな母なるものとして描かれていた。しかし自然は徐徐に男性的、躍動的となり、その統治圏は可視的現象にとどまらず、歴史の流れにまで及ぶ。円熟期の作品の語るところでは、自然と人間界が親密な関係にあった古代ギリシアは昼の時代に栄えた。それ以後は自然と人間は疎遠になり、夜の時代が続いている。けれども時代の交代、持続とは、宇宙＝自然の生命活動の結果として必然的に生じるのであり、避けることはできない。

ヘルダーリンにとってのキリストは、昼の時代の終末に、やがて新たな可能性に充ちて再帰する昼の時代の訪れを約して去った神である。キリスト再臨こそが新時代到来の証と、ヘルダーリンは信ずる。

自らの生涯を以て、時代の分岐点を告知したキリストに倣い、詩人は自らの置かれた時点を、神的自然

の躍動の一環として意味づけ、世の人々に告知しようとしたのである。

次章ではまず、ヘルダーリンの自然観の変化を追うことにしよう。

§2　自然の流動化と神観の変化

ヘルダーリンの実際の創作活動は、下級神学校時代から、精神病の悪化までの約２０年間であるが、本格的に詩作に使命感を見出すようになったのは、大学を卒業して2年後の１７９５年、住込家庭教師としてフランクフルトの銀行家の家庭に赴き、そこでズゼッテ・ゴンタルト夫人と熱烈に愛し合ったことを契機としている。この体験により、ヘルダーリンは彼女に理想の女性ディオティーマの名を与え、小説『ヒュペーリオン』や、数々の詩作品に登場させて、その優れた品性を繰り返し賞讃した。これが一般にディオティーマ体験と呼ばれる、詩人の生涯で最も幸福な一時期であった。

彼は元来、思索を好む性格であったし、大学ではヘーゲル、シェリングのような友人と親しく交わったこともあって、哲学には強く心を引かれていた。フィヒテの講義に出席して感銘を受けてもいる。しかし彼にとって受け容れ難かったのは、当時の思想界を支配していた自然観であった。彼のように「自然の神々の腕のなかでひととなった」（『わたしが少年のころには……』Ⅰ　p.292）人物が、自然を現象の総括として先天的法則である悟性の指令下においたカント哲学、自然全体を自我の産物と見るフィヒテ哲学に何らかの抵抗を覚えたのも当然であった。

「ヘルダーリンにとって、詩と、哲学・神学上の省察の間には溝があった。先達の思想を受容しても、それだけでは溝に架橋できなかった。」（J. Hoffmeister “Hölderlin und Philosophie” p.39）

そこへ理想の恋人が現われて、悩みは解決した。「思いえがいていたよりも美しいひと」を前に、彼は「このひとりのひとをはぐくんだのは／おんみだ、永遠の調和のうちに／生き生きと完成している自然だ！」（『ディオティーマ』　Ⅰ　p.248）と、創造主である自然を讃美せずにはいられなかった。

この時点で、詩作即ち自然の讃美が「私には不可欠な欲求となったいそしみ、それなしには私には地上の幸福を味わうことができないいそしみ、この喜ばしい、すくなくとも純粋無垢ないそしみ」（Ⅳ p.261）として確立する。

同時に学生時代の諸作品に描かれたような、単なる美しい風景画の趣ある自然は、「調和の女神」「自然の母なる美」といった観念的神性の統治を離れ、静寂、美、調和の枠をうち破って大きく変貌する。フランクフルト時代の作品の中でも、『エーテルに寄す』は、自然の力強い躍動を描写している。

「そしてあなた（父なるエーテル）の永遠の充溢からはいのちにみちた大気が／生のあらゆる脈管を通じてほとばしり流れる。」（Ⅰ　p.239）

手塚富雄はこの作品に関して「彼の自然詩がその敬虔性において大きく歩を進めた。」（手塚富雄著作集Ⅰ　中央公論社 p.233）と述べている。自然の中心にある父なるエーテルは、キリスト教の超越的絶対的な神とは一致せず、自然神的な印象を与え、特徴はまだ明確ではない。けれども、自然が観念的な楽園から現実界に移ったことは断言できる。

更にフランクフルト時代の自然観の変遷を如実に示す作品は『閑暇』である。これに「ミヒェルは重きをおいて、後の諸エレギーへの中間頃だという意味のことを述べているが、同感される。ただ形式上のことだけではなく、そこには詩想、さらには世界把握において重大な展開が見られるのである。」（手塚・全集Ⅰ　p.286）

「（騒乱の精神は）自然の掟の表から、一綴りの文字さえ抹消することもしない。／自然よ！　それも

平和の精神といっしょに、同じ一つの胎から生れたもの――／だからそれもまた、おんみの息子なのだ。」（Ⅰ　p.335）

自然の内部では変化が不可避の要素となっている。

1798年、ヘルダーリンとゴンタルト夫人との親密さは彼女の夫の敵意を招き、職を辞したヘルダーリンは、ホンブルクの宮廷に仕える友人シンクレーアのもとに赴いた。ヘルダーリンはここで自ら時代の嵐に身をさらすことになった。

「彼の交友関係がシンクレーアを中心として特に濃い政治的雰囲気の中にあったということである。」

「南ドイツ、ことにヴュルテムベルクには、その公国としての現政治体制をくつがえして、スイスや北イタリアの例に倣った親仏共和国を樹てようとする動きがあり、シンクレーアはそれの賛同者であった。」（手塚　全集Ⅰ　p.310～311）

そのような事情も加わって、ヘルダーリンの描く自然は、中心にある神もろともますますダイナミックとなる。彼の未完の戯曲『エンペードクレスの死』は、フランクフルト、ホンブルク双方で執筆されたが、自然観の変化をはっきりと裏付けている。

ヘルダーリンをジャコバン主義者と解釈したベルトーの、センセーショナルな著書“Hölderlin und Französische Revolution”は、戯曲の第一稿を、ヴュルテムベルク公国が覆えり、共和国が生れた暁に上演する予定だった祝祭劇と見る。ここではヘルダーリンと政治との関係に詳しく立ち入る余裕はないが、ベルトーの論拠はヘルダーリンの描く母なる大地の性格の変化、即ちかつての優しい母から秘め隠し保存する大地への移行であった。（『理想』1981.3　p.39～40を参照）確かに、第三稿の大地は、目まぐるしく流動する表面の内部に、尽きぬエネルギーを蓄えている。

「おお、見るがいい！　大地の酔うた姿が輝いている。／青年よ、おまえの眼の前にこの若々しい姿が輝いているのだ。／すべての国々にわたってざわめき、動き、／変転し、わかわかしく軽やかに、敬虔にも厳粛に、／めまぐるしい輪舞が踊られている。これは／死すべき身の者たちが霊を、原初の父をことほぐためなのだ」（Ⅲ　P.397）

一大生命体である大地あるいは世界の心臓ともいうべき「霊」（Geist）、「原初の父」（der alte Vater）は、ヘルダーリン自身の小論文『エムペドクレスの底にあるもの』では「生命あるもの」（das Lebendige）とも表現されている。「生命あるもの」は自然領域全体の涸渇を防ぐため、犠牲としてエンペードクレスを選び出す点では人格的である。しかし一方では把握不可能な灼熱する根源的生命であり、戯曲第三稿では「祭のために雷雨を用意する」（Ⅲ　p.441）点では自然神ゼウスの面影をも備えている。

ホンブルク期以降の作品に、父なる神は静かなエーテルの姿で登場することもあるが、恐るべき雷神にも変化する。次に引用する詩句も、神の危険な火としての側面を表わしている。

「贈与者が惜しむことをしなかったならば／すでに遠い代からその恵みによって／われらの山も地も火と燃えていただろうに。」（『平和の祝』Ⅱ　p.175）

少年時代から古典語を得意とし、ギリシアの思想、文学に詳しかったヘルダーリンにおいて、ヘラクレイトスの思想――コスモスを「一定の限度において燃え、一定の限度において消ゆる永遠に生くる火」とし、「電光（雷神ゼウス）こそすべての運行を繰るなれ」と見た（斎藤忍随『知者たちの言葉』岩波新書　p.46～47）――に見られる宇宙観、神観と、キリスト教の目的論的宇宙観、人格神の概念とが融合したということもできる。

また、ヘルダーリンの時代の思想的傾向を考慮するならば、合理主義的な啓蒙思想が普遍的、規範的なものを追及したのに対し、新しい流れであるロマン派は「生命の流れ」の観念を持ち、凝結した絶対原理を否定し、「あらゆる生と創造の本質を、定立と対立の交互作用のうちに、その分離と、またより高い第三者である反対立における結合に見出」そうとしていた。（石井靖夫『ドイツ・ロマン派運動の本質』南江堂　p.165）

ヘルダーリンの書簡にも、明らかに時代を反映した神観や弁証法的な思想を読みとることができる。けれども、いよいよ円熟期にかかった詩人の特異な感覚は、このような時代的な、またギリシア、キリスト教という既成の思想的枠組から外れた部分を、自然の中に捉えていたといわねばならない。

1800年、生活に困窮したヘルダーリンはシュトゥットガルトに移り、数か月間友人宅に滞在し、文人らと交わる機会を持った。

「このようなもろもろの状況のもとで展開される彼の詩世界は、真に驚くべき力と偉大さを示しはじめるのである。（中略）飛躍的な発展であり、彼の天才はその全容においていまわれわれの前に開けてくる。詩の大いなる季節の開始である。」（手塚　全集Ⅱ　p.8）

この時期の詩人は「神の荒天のもとに／頭をさらして立ち、」「深く震撼されて　神なるものの悩みを／共に悩みながら　激しく襲いやまぬ嵐のなかに」あって「父の雷火そのものをおのが手に／つかみ、その天上の賜物を　歌に／つつんで世の人々に頒つ」（『あたかも祝いの日の明けゆくとき……』　Ⅱ p.147～148）詩人の使命の認識をますます強めている。

ハイデッガーは、この作品の解説で次のように述べている。

「詩人たちは仲介を絶したものに対して直接性を許さねばならぬが、しかしその仲介を同時に比類なきものとして引き受けねばならない。」「聖なるものは恐るべきものdas Entsetzliche　そのものである。」（『ヘルダーリンの詩の解明』　手塚他訳　理想社　p.108およびp.96）

不可解で恐るべき危険な神が、自然現象のみならず、人間の歴史にまで統治権を拡大してゆく経過を、次章で論ずることにする。

§3　時の神と自然

自然およびその支配者が躍動性を増すに伴って認められるのは、時間的なもの――時代、時間の流れ――に対するヘルダーリンの態度が、否定から肯定へと変化したことである。フランクフルト時代以前の美しい自然とは、現実的な時間の影響を受けぬ世界であった。学生時代の革命をテーマにした作品における、革命後に成立するべき理想的社会も、時間の作用を受けぬものとして描かれている。

「成就の予感は誇高い胸を／運命と時間のうえへ高めるのだ――」（『自由に寄せる讃歌』Ⅰ p.263）

時の流れに支配された現実の世界を「懲罰の場」と表現し、（『青年から賢い助言者たちに』　Ⅰ p.263）「ヘラスの黄金の刻のめぐるさなかには／君は歳月のうつろいも感じなかったことだろう」（『ギリシァ』　Ⅰ　p.210）と、詩人は嘆息した。

フランクフルトの愛の喜びの世界からも、時間は欠落している。

「おお歓喜よ！　そのようにわたしたちは／おんみのうちに至福な墓を見いだす」（『ディオティーマ』Ⅰ　p.252～253）

しかし戯曲『エンペードクレスの死』の三つの稿を比較するなら、彼が現実逃避的態度を改め、時の流れの肯定に至る過程が明確となる。これらは前章でも述べたように、フランクフルト時代の終り頃から1800年に亘って執筆され、遂に未完に終ったものである。

一、二稿では、自然の神々の友であった超能力者エンペードクレスが、傲慢の罪と神々の怒とによって自然から追放される。彼は神々との唯一の和解手段である死を選ぶ。けれども第三稿では、冒瀆や神々の怒といったモチーフは弱まり、彼の死も、時代の流れによってひき起こされる不可避の出来事となっている。死を目前に控えた主人公は、愛弟子パウサニアスに説いて言う。

「時間的な結合はどんなものでも、あるがままではいない。／わたしたちは別れなくてはならないのだ、わが子よ！　だからどうぞ／わたしの運命をひきとめないでくれ、」「そしてわたしがとどまっていることは、幾年にもわたるのではなく、／やがて過ぎ去らねばならぬ一つのひらめきにすぎず、／琴の調べのなかの一つの音にすぎない――」（Ⅲ　p.397、p.401）

時代の流れは自然における回避できぬ強力な要素となり、この中で人間の運命までが決定されるようになる。自然が能動化の過程で「歴史の地平に踏み込み、自然の内部から歴史が浮上する」（G. Lepper "Friedrich Hölderlin" p.64）ことは、ヘルダーリンの自然観の推移において見逃せぬ点の一つである。『エンペードクレスの死』執筆中の１７９９年の詩『時の霊』は、ヘルダーリンの歴史的現実直視を端的に示している。

「わたしの頭の上で、おんみ　時の霊よ、／おんみが黒雲に君臨してもう余りに久しい。／わたしの周りは荒れすさび　不安にふるえ、／見わたす限り　ただ崩壊と動揺がある。

ああ　子供のように　わたしはよく眼をふせて、／おんみから逃れようと洞穴にかくれたりして、／愚かにも、万物をゆさぶる者　おんみが／いない場所を見つけたいと思う。

どうかもう　わたしが眼を見開いたまま　おんみに／父よ　会えるようにして下さい、おんみこそ／その光りで初めてわたしの精神を目覚まし、わたしを／見事な生命の世界につれ出してくれたお方ではありませんか、父よ。――」（Ⅰ　p.335）

ヘルダーリンの作品に時の霊が君臨するようになったのはホンブルク時代であった。体制変革の企ては失敗に帰したが、時代への関与は以後も彼の課題であり続ける。

当時の思潮に目を向けるなら、「超時間的規範体系がますます徹底的に解体されていく」と共に、「われわれがわれわれ自身をわれわれ人間存在の最内奥の領域に至るまで、歴史的実存として理解しなければならない、という認識がますます増大していく」状況であった。（『W. Schulz『変貌した世界の哲学』二玄社　藤田健治他訳　p．41～42）中でもヘーゲル――少なくともヘルダーリンとはフランクフルト時代までは直接交渉があった――は、「神を精神という概念へと止揚することによって、神を世界史の運動を通して『歴史化』することをめざし」た。（同　p．47）

『時の霊』以外のヘルダーリンの作品にも、超時間的不動の座から、歴史の流動の只中に下り来た神の姿を見出すことができる。中でも彼の代表的作品の一つ『パンと葡萄酒』（１８００～１８０１）で、自然の統治者は歴史をもその掌中におさめることになる。ここで一大生命である世界は、時代の昼夜の交代という歴史的法則の支配下に入るのである。

「すなわち、しばらく前に（われわれにはそれは遠い昔のことと思われるのだ）、／生に幸を与えていた神々のすべてが天上へ去って行ったとき、／そして『父』が人類から面（おもて）をそむけて／悲しみが必然のこととして地上にひろがり、／その果てに一人のもの静かな精霊（ゲニウス）が出現して、天上の慰めをそそぎながら／昼の終末を告げて消え去ったとき、／いくつかの賜物が残された、かつて天上の合唱が高らかにひびき／それがまた蘇るべきことの証（しるし）として。」（Ⅱ　p．115）

「もの静かなゲニウス」とはキリスト、「賜物」とはパンと葡萄酒、「昼」とは古代ギリシア時代を指

している。主の再臨と時を同じくする昼の時代の再来に対し、ヘルダーリンが非常に強い期待を抱いていたことは、諸作品や書簡から明らかにすることができる。例えば彼は１８０１年初頭の弟宛書簡で、オーストリア・フランス間の平和締結に際し、次のような熱い期待を吐露した。

「エゴイズムのどんな形態も、慈悲深い愛の聖なる支配のもとに屈服するだろうということ、共同の霊がいっさいの上に、いっさいのなかに行き渡るだろうということ（中略）このことをぼくは見る。そして信ずるのだ。」（Ⅳ　p．４４５）

ヘルダーリンの新時代への期待を育んだ土壌には、生活の近代化、各専門分野への人々の分散を懸念するロマン主義者らの、知識再総合への志向、ヘルダーリンの故郷シュヴァーベンの神学者エティンガーが１７５９年の著書“Die guldene Zeit”で説いた、来るべき終末に成立する包括的学問、Lichtwissenschaftへの期待等が考えられる。

特に後者の思想はシェリングに大きく影響し、彼が黄金時代の予見に至る契機となった。

ヘルダーリンは、新時代に自然と人間、また人間同志が幸福に結びつく――古代ギリシア時代には既にこれは実現されていた――ことを期待したが、その要因を学問ではなく、自然の法則的力に見出している。

自然に内在する結合力が再び戻れば、分散の時代は終り、「愛する力のある民が父の腕のなかに集まって、／むかしながらに人間らしく喜び、ひとつの霊が万人に共通のものとなる」（『多島海』Ⅱ　p.137）

「われらの父なるエーテルを　各人が　万人が　認識して　おのが所有とする時の来る」（『パンと葡萄酒』　Ⅱ　p．１１６）

『パンと葡萄酒』等の作品が、夜の時代の到来と、人類の罪や神の怒とを一切関連づけていない点には注目すべきである。夜の時代の持続も、キリストの再臨も、時の霊の法則に基づく必然的な出来事として描かれている。

「（われらの種族は）自分の営みだけに縛りつけられていて、だれもみなかましい仕事場のなかで／自分の声しか聞かず、荒々しくも力強い腕をふるって／たえまなく多くの仕事をしているが、このあわれな者たちの労苦は／さながらフリアエのように、いよいよますます不毛になるばかりだ。」（『多島海』　Ⅱ　p．１３７）

しかし、「不滅のものたち（自然力）のものたちの業はおのずから進み、」「人間の作為は人間のあいだにおいてもはや用をなさなくなる。」（『パトモス』Ⅱ　p．２２６）そして

「神なるもの（ein Gott）が現われるとき　空と地と海は／いっさいを更新する輝きに光被されるのだ。」（『宥和するものよ……』第一～三稿　Ⅱ　p．１６０、p．１６５、p．１６９）

第二のギリシャが、詩人自身の生きる時空に、新たな花を咲かせるという期待の中で、時間の流れはもはや厭うべき要素ではなく、希望が実現するために不可欠の条件に変じたのである。

§４　瞬間における自然

手塚富雄の大著『ヘルダーリン』は、ヘルダーリンが「時」の詩人であることを繰り返し指摘している。

「元来、フランス革命以来、時代の意識は激しくこの若い心を摑んだ。そのなかで詩人としてのおのがあり方に思いを深めてゆく彼は、彼特有の精神の振幅の中に自覚的に『時』から逃避すまいという思いを強めてゆくのである。詩『時の霊』はその道程における顕著な表現と言ってよい。」（全集Ⅰ　p.363）

前章で見たように、ヘルダーリンにおいて時間の流れは、ホンブルク時代以降、主の再臨と新時代の訪れを促す力となっていた。その後精神異常となるまでの短い期間中に、時間に対する詩人の考え方は、更に展開を見る。それは、時間の一般的な持続における自然現象、ひいては歴史的転変の描写から、瞬間――夜の

時代にあっても、各々が神なるものの生命活動から生じている――のうちに世界を捉える立場への転換、換言すれば線的時間から、点的時間への志向の変化といえる。

『ヒュペーリオン』第二部はホンブルクで『時の霊』と同じ年に世に出ているが、その末尾部分は「別れ別れになったものはすべてまためぐりあうのだ。／「血管は心臓で別れてまた心臓へ帰る。そしていっさいは、一なる、永遠の、灼熱している生命なのだ。」（Ⅲ　p.151　）といった生命感に溢れている。生の哲学の代表者ディルタイは『体験と詩作』で『ヒュペーリオン』を取り上げ、次のように述べている。

「この悲劇における言葉と構成におけるリズムは、ヘルダーリンの哲学の究極的かつ最高の概念、即ち生のリズムそのものを象徴している。詩人は生のリズムの中に、生の流動における法則が表出しているのを見た。一方ヘーゲルは同じ法則を精神の弁証法的進展の中に見出したのだが。」（“Das Erlebnis und die Dichtung” Vandenhoeck & Ruprecht p.285）

時間の持続を前提とした生のリズムと調和して、ヒュペーリオンは亡き恋人や遙かな師友と霊的に交わり、幸福感にひたっているのである。

１８００年作の『多島海』では、「神々の言葉、あの変転と生成を理解」しようとの詩人の意志が表明され、（Ⅱ　p.139）『ヒュペーリオン』に比較して、歴史へ関与しようとの能動性が見られるが、ここでもなお詩人に対して「あまりに強大な力でわたしの頭を捕え」る「狂奔する時の流れ」（Ⅱ　p.139）の持続的な力が働いている。

しかし、同じホンブルク時代に彼は小論文『エンペードクレスの底にあるもの』に、ギリシアの哲人エンペードクレスを、瞬間の中に時代全体を捉えることのできる詩人として描いたのである。

「しかもそれはただ彼の作品のための思考ではなかった。彼はそれをよすがとして彼自身と時代との関係をあますところなく考え抜いたのである。それは時代の中での彼自身の態度に対する方向づけであったと言っていいのである。」（手塚　全集Ⅰ　P.431）

ここで、難解な哲学諸論文――ベルトーはこれらを、神聖なものを遠回しに象徴的に表現するための暗号化の実験的試みかも知れないと見る（『理想』1981.3　p.40）――の一つである『エムペドクレスの底にあるもの』およびその後に書かれた戯曲の第三稿のエンペードクレス像を見ることにしよう。

まず論文では「あらゆる意味で詩人として生まれてきた」エンペードクレスにおいて、「同時代人たちが、忘恩のかぎりをつくして自然を無視する」傾向を最も強めた時、（これは史実に基づくのでなく、ヘルダーリン自身の時代を反映させている。）「時代が自己を個体化」した。時代とはマクロ的に見た自然の生命活動の一環としての形態であり、その結果自然が「このエンペードクレスという人物の精神と口に移され」る。「かれの運命は、瞬間的な統一としてのかれ自身において、示される。もっともこの統一は、それ以上のものとなるためには解体せざるをえないものではあるが。」

でなければ「世界の生命が、ひとつの個者となって死滅してしまうからだ。」（引用は各々Ⅰ　p.8、p.12、p.10、p.12、p.8、p.9）

エンペードクレスは、大生命である世界の一瞬の形態を、詩の言葉に刻印して滅びるのである。

第三稿ではエンペードクレス自ら「ひとつの国土が死滅することになっているおりには、／霊は最後にいたってなおも一人の人間を選び、／彼によって白鳥の歌を、最後の生を鳴り響かせる」（Ⅲ　p.411）と語っている。論文は難解、戯曲は未完であるが、あえて解釈を試みるなら次のように要約できよう。

身近な自然現象の中に「神々の声」を聞きとる鋭敏な感覚を持つエンペードクレスは、時代の闇のため

に人間界と疎遠な状態にある自然を告知する。だが歴史的状況、即ち自然と世との関係もしくは距離は、一瞬後には既に変化している。従って告知と共に詩人は亡びねばならない。

ヘルダーリンが目を向けるのはもはや感覚で捉えられる自然現象ではない。彼は自然の生命法則運動である歴史に注目し、自らの置かれた時空に、時代の流動を支える「父なるもの」との関係を探り出そうとしたのである。１７９９年から祖国愛をテーマとした一群の作品、書簡が見られるようになり、ヘルダーリン研究家はこれを「西欧（ギリシアに対する祖国の意）への転向」と表現した。本来宗教的なヘルダーリンの愛国心は、第二次大戦中、国粋主義に利用されることになったが。

１８０１年初頭から、彼は家庭教師としてハウプドヴィル、次いでボルドーにも赴いたが、いずれも短期間で解約となっている。既に精神異常の兆が見えていたとも想像されるが、詩人自らはその理由を全く明らかにしていないのである。

１８０２年、異常な風体で母の住むニュルティンゲンに帰り、落ち着きを取り戻してから友人宛に「フランスでアポロに撃たれた」との異様な印象を書き送っている。彼のエンペードクレス同様、彼も一瞬、自然全体と合体したのではないかとすら思わせる表現である。

それ以後、彼は発作的に狂暴になるなど、精神病の症状を呈しながらも、『パトモス』、『唯一者』『追想』等の詩を書き、一方ではそれまでにほぼ完成していたソポクレス悲劇の独訳を出版するに際し、手を加えている。翻訳に添えられた『アンティゴネー注解』は難解であるが、次に引用する結末部で、詩人は彼の最終的目標として、今、ここの瞬間における自然もしくは世界の描写への意志を表明したと考えられる。

「（ソポクレスが）表現したことは、かれの時代の運命であり、かれの祖国の形式なのである。美化、理想化は、しようと思えばできるだろう。（中略）しかし祖国に行なわれている諸観念は、少なくともその列序の上では、詩人が世界の縮写的表出を志す以上、かれの手によって変更を加えられることは、あってはならぬのである。現代のわれわれにとって、このような形式は極めて有効なものである。」（Ⅳ　ｐ．６３）

ヘルダーリンが捉えようとした「瞬間」から想起されるのは、現代の哲学者バシュラールである。彼は、時間を連続と捉えたベルグソンを批判し、瞬間という絶対的非連続性の中に時間の本質を見ようとした。彼は小論『詩的瞬間と形而上学的瞬間』で次のように述べているが、これはヘルダーリンの最終的な思想と非常に類似している。

「ポエジーとは瞬間化された形而上学である。それは、短いひとつの詩の中に、全宇宙の展望と、ひとつの魂の秘密、ひとつの存在の秘密、そしてさまざまの対象の秘密をすべて同時に与えるはずである。」

「われわれは、すべての真実な詩の中に（中略）特に『垂直的』と呼んでみたい時間の要素を見出すことができるのである。」（『瞬間と持続』　掛下栄一郎訳、紀国屋書店　ｐ．１２５～１２６）

この際ヘルダーリンとバシュラールの間に徹底的な差異があることも指摘しておかねばならない。後者にあっては、ポエジーが「瞬間を探し求め」「瞬間を創造する」（同　ｐ．１３５）のに対し、前者は瞬間を神的なものとしてあくまでも詩人の上位に置く。自らを瞬間がポエジーとなるための仲介者であろうとするのである。

さて、バシュラールの「垂直的瞬間」が歌われている、ヘルダーリンの詩句を引用してみよう。

「しかしすべてのものの上にいます／父が何事にもまさって愛することは、揺るがぬ文字が／まもり育てられんこと、そして持続するものが／よく釈き明されんことだ。ドイツの歌はその使命に従う。」

（『パトモス』 Ⅱ　p．229）

「記憶を奪う／大洋はまた記憶を返すのだ、／愛はまたひたすらに眼をひき留める。／だが留まるものをうち建てるのは詩人だ。」（『追想』 Ⅱ　p．232）

手塚富雄は『パトモス』の「揺がぬ文字」と「持続するもの」とを、「具体的にどのようなものとして受け取るかは、これもその深浅広狭が人々によってさまざまであろう」と前置きした上で、「この世の根柢にあって大いなる宥和をあらしめるもの」と、確信をもって解釈している。また『追想』の「留まるもの」は、「本源に根ざしてわれわれを本然のわれわれたらしめる動かぬもの」と規定している。（著作集 Ⅱ　p．368、p．378）

本論もこれらの詩句を宗教的側面から解釈することにしたい。即ち「揺がぬ文字」「持続するもの」「留まるもの」のいずれも、いかなる時代にあっても断たれることのない、父なる神（宇宙の心臓）と世界との絆、換言すれば、自然的・歴史的世界に現われるあらゆる瞬間を、宇宙の内奥から生み出している力と見るものである。

最後にキリストに触れておかねばならない。なぜならキリストの短い生涯は、昼から夜への時代の転換点と人間との一瞬の合体であったからである。この点でキリストはエンペードクレスと重なり合うが、戯曲第三稿ではキリストが主人公よりも偉大な唯一の者として暗示されている。エジプトの老翁マーネスは、死を前にしたエンペードクレスにこのように語りかけている。

「わたしはひとことだけ言っておきたい。それを考えてみるがいい、酔いしれた者よ！／この時代においては権利を与えられている者はただ一人だし、／黒々とした罪によって高貴にされる者はただ一人だ。」（Ⅲ　p．407）

ヘルダーリン的なキリスト像は、まず『パンと葡萄酒』で「もの静かな精霊」として登場したが、『パトモス』ではより明確になっている。

「こうして師はもう一度みずからを現して／この世に別れを告げたのだ。／いまこそ王者なる太陽の日は消え、／かれはその王笏　直射する光の矢を、／神として悩みながら折ったのだ、／だがそれは　時をえてふたたびその光が帰ってくるためだった。／この別離はおそらく　より遅れてはならなかったのであろう、／ためらうのはかえって作為のわざで、掟と断絶し、／それにそむくこととなったであろう。」（Ⅱ　p．223～224）

キリストの死の理由に関し、E．ラッハマンは著書“Der Versöhnende”で、キリストが自らの運命を肯定し、担ったことにあると述べ、B．アレマンの「キリストは死を喜び、歓声を上げて地を去り、父の許へ最短の道を通って帰り行く熱狂的な神」との説に反駁している。

「キリストは死への憧れでなく、極めて厳しい掟に服従したのだ。」（同著　p.49）

本論はこの説を支持したい。そこではじめて『唯一者』第二稿のキリストが「死の道を行く」ことによって「もろもろの民族の死への陶酔をおしとどめ」諸民族に「歴運の所在を知」らしめる使命を全うできるからだ。その結果「各人は一個のおのれとなり、重大な瞬間を、／また大いなる時代の歴運を、／そのなかに燃える火を怖れながらも適切に受けとめて行為する」からである。（Ⅱ　p．210）

「あまりにも／限度を越えて　人間の手が生命に／挑戦する時代」（Ⅱ　p．211）にあって、キリストは少なくともヘルダーリンにとっては生の導き手であった。時代的運命を完璧に受容したキリストに倣い、彼は夜の時代のドイツの詩人として運命を担おうとした。しかし、アポロの姿をとった時代の運命は、あまりにも過酷だったのである。